サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレ報告書

「労働の未来を想像しよう」

（ビエンナーレ訪問日　3月11日−12日）

岩　﨑　陽　子

はじめに

フランス東部の中堅都市サンテティエンヌでは、2017年３月９日より４月９日の一ヶ月間、第10回目の節目となる国際デザインビエンナーレが開催された。

毎年定められたテーマに沿って展示がなされるが、今年のテーマはWorking Promesseという英語とフランス語が混じった造語で、労働がテーマであった。おりしもフランスでは昨年より政権の労働基準法改正（コムリ法案）が労働者の権利を狭めるものとして、学生などを巻き込んだ大規模なストライキがあちこちで展開され、労働への関心は社会テーマとして非常に高かった。このような話題をビエンナーレの主題としたことは決して軽はずみに流行を追いかけたわけではない。

サンテティエンヌは昔から武器製造、リボンや縁飾りといった織物産業で栄えており、こうした労働に従事する者の技術向上を目的として、約200年前からすでにエコール・デ・ボザールという美術学校が開設されている。こうした「ものづくりの街」の素地は脈々と受け継がれ、現在の場所に2009年にCité du design（以下シテと呼称）という芸術高等学校やデザイン学校を含む複合的研究施設が誕生した。ビエンナーレは毎年このシテを拠点として展開されている。

このような歴史的背景をもつ街、サンテティエンヌではシテを卒業した学生たちがデザインのもつ力を知り、こうした現場で将来働きたいと夢見る場所でもある。また街の側でも、武器製造やかつて栄えた炭鉱産業が衰退の一途をたどる中、何とか若い人材を街に留め、いかに街全体に活気をもたらすかを大きな課題にしている。

こうしたうねりが大きな頂点を描いたのが今回の

労働をテーマとするビエンナーレであったといえよう。プロアーティストやデザイナーがディレクターとして各会場に配置されているとはいえ、ビエンナーレの主体はサンテティエンヌを中心とする、近郊の美術学校で美術やデザインを学ぶ学生たちであった。彼らの労働が未来を支え、また未来の労働が彼らの生活を実現するのである。Working Promesseにはそのような意味がこめられている。Workingは仕事、労働。Promesseには「将来への希望」と「契約」のどちらの意味もある。仕事が時に契約として人を縛り、賃金が人に成功をもたらす可能性がある。こうした労働の未来はどうなっていくのか、どうあるべきか。若いクリエイターたちがビエンナーレで描く「労働の変化」への熱いまなざしをレポートする。

1　ビエンナーレ概要

サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレはシテをメイン会場とし、その他にもサンテティエンヌにある美術工芸館、炭鉱博物館、近現代美術館、劇場、ホテル、トラムの駅、ル・コルビュジエの建築群がある近郊都市フェルミニに至るまで様々な会

場で展示を行っていた。組織としては11の国際委員会、９のデザインやアートの学校、30のプロジェクト、９の企業プロジェクト、Esadseと称されてビエンナーレで中心的役割を果たすサンテティエンヌのシテにある美術デザイン学校の15のプロジェクト、また国際デザイン展として今年の招待都市であるアメリカのデトロイト市の展示など、複数のプロジェクトが同時に展開されている。今年の総合ディレクターは、シテのリサーチ・ディレクターでもあるOlivier PEYRICOT（以下ペリコと表記）が務めた。

ペリコはFIGARO Plus紙のインタビューに以下のように答えている。

「労働が今回の焦点となっているテーマだ。雇用は下を向き、労働作業は自動化され、労働者は様々な不合理な仕事に支配されてしまっている」

労働の変化を捉える上でペリコが示した切り口は「デジタル化」と「労働の場」の問題である。デジタル化の問題は特に深刻で、良い面もある反面、例えばメールのやり取りのように、海のように人を襲い、夜中でも時を構わずにベッドの中にまで労働が持ち込まれている。こうしたデジタルの功罪をデザインの中にどのように生かしていくのかを再考する必要がある。またもう一方の「労働の場」については、最近話題になっている新しい労働に付随して、よりフレキシブルなかたちで場所を共有し、個人でも団体でも労働市場により気軽に参入できることを目指したものである。例えばコワーキングスタイルやファブラボなどが日本でも知られている。

こうした切り口から労働を見ると、いわゆるウーバライゼーションのように、既存のビジネスモデルを発想の転換によって一新し、人々の生活スタイルまで変えてしまうことがデザインには可能であることがわかる。

ここでペリコが力説するのは、デザインとは「もの」のデザインだけではなく、社会そのものや環境、都市の中でのつながりのあり方もデザインの視点で見直せるという点である。実際に2008年のビエンナーレでは協働やつながりをテーマに、デザイナーたちは各プロジェクトに集団的に関わることが求められた。研究室の中でクールなデザインを追いかけるのではなく、街に出て製造業者や販売者、末端のクライアントにいたるまでを見届けて関わることにより、デザインの可能性と問題点を各人が明確に見つけ出すことが可能になった。

また、サンテティエンヌのデザインビエンナーレの特徴は、毎回新しいテーマを掲げながら過去に残した課題や新しい問題系を引き継ぎ、発展させていく点にある。こうした取り組みが街全体で可能なのも、サンテティエンヌがデザインによって人口を増やし、新しい産業を生み出すことに前向きであることと、シテの求心的な存在が大きい。例えばサンテティエンヌではデザインが身近なものであり、人々は日常生活においてこれと常に向き合ってすごしている。サンテティエンヌの国有鉄道駅Chateaux creux駅と少し離れた市内を結ぶリパブリック通りは昔は栄えた商店街であったが、現在はシャッター店舗が多くなってしまった。この通りでシテでは２年前からEU都市の学際交流プロジェクトの一環として、Human Citiesというデザインによる街の活性化の試みをしており、今回のビエンナーレでも現地におけるワークショップやシテの会場内でのパネル発表などが用意されていた。約50ものプロジェクトが実験的にこの通りで実施されてきており、市民もそれに日常的に関わっているのである。こうしてシテという閉じられた学校内部だけではなく、実際

の生活の場で「コンセプトを実験する」というやり方はサンテティエンヌの市民の協力とシテの推進力がなければ不可能であろう。

今回の招待都市であったアメリカのデトロイト市も実は同じ問題を抱えていた。自動車産業の衰退によって危機的状況に陥ったデトロイト市は、文化とデザインの力で「再生」を図ろうとしており、今回のビエンナーレではサンテティエンヌとの成果共有が図られていた。デトロイトは単にブースを出展するだけではなく、会期中には「デトロイトカフェ」を中庭で展開し、音楽や食べ物、それを楽しむ家具などでデトロイトの多角的なデザイン力をアピールした。都市型の近郊農業もテーマに、現地の作物を使ったスープパーティーも催されるなど、都市をデザインする新たな方向性が示されたといえよう。

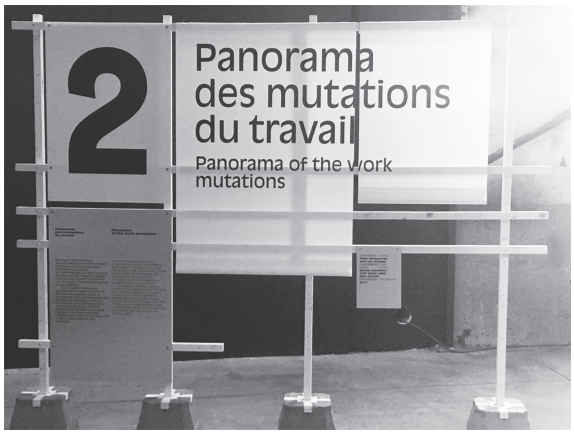
以上、ビエンナーレの３つの主要なテーマを再度整理すると

①デジタルと労働
②共有のユートピア（労働の場）
③未来の人間像

の３点である。このビエンナーレは研究プログラムでもあり、アンケートを実施し、仮設を立て、実験をするという手法をデザインの分野で行っている。そういう意味では、常にシテはデザインの未来を学問として取り上げ、先端研究の結果をビエンナーレで提示しているといえる。

2　展示作品

展示はシテを中心として近隣の美術館や劇場などに広がり、会場だけでも公式の展覧会会場だけでも60以上あるプロジェクトすべてを網羅的に取り上げるのは不可能である。シテで行われた、ビエンナーレの総合ディレクターであるペリコの監修によるプロジェクト、「労働の変化のパノラマ」展に注目したい。彼のプロジェクトブースはシテの第二会場にあり、ダイレクトにビエンナーレの主題とつながる内容で、多くの来場者の注目を集めていた。



コンピューターやスマートフォンなどの工業製品の普及により、労働が我々の家の中にまで入り込んできた現在、職場ではなく家庭が工業製品の最終目的地となった。こうしてデジタル製品は様々なフェーズで使われるようになり、仕事だけで出なく、レジャーなど、日常生活における複合的な使用法が広まっている。その中でデザイナーはみんな、目に見えない大きな仕事の一部を担う無用の存在になってきているとペリコは考える。

よって彼のプロジェクト「労働の変化のパノラマ」展はこうしたデジタルと労働の最近の関係性から、最終的にはなぜ労働するのかという労働の目的に至るまでの様々なあり方と可能性について、パノラマ的に俯瞰する目的で構成されている。ペリコによれば、「こうした企画が不安の種になったり、逆に救いの神になるにしても、労働の未来の変化やその可能性を考えることは、社会の新しい組織、新しい道具、そして共に生きる新しい方法を考え出す絶好のチャンスを我々に与え、すぐれて実存的に自らの生の可能性を探ることなのである。」と述べている。

会場は第１から６章までに分けられ、「工場の最終目的地としての家庭」「デジタル労働」「上昇」「特色のない事務室と創造的なホワイトカラーの時間」「もし全自動なら」「労働の目的」と題した展示が行われていた。

未来的な台所用品、家具、またオフィスの部屋など、実際に手に取ったり中に入っていすに座ったりするなど、自由に体感できる仕組みになっており、

来場者は思い思いに斬新なデザインの数々を楽しんでいた。

3　ユネスコ創造都市名古屋とサンテティエンヌ

サンテティエンヌがフランス国内でデザイン都市としての地位を確立したのは、ビエンナーレの10年にわたる継続的な開催と共に、2010年にユネスコ創造都市（UNESCO Creative Cities）に指定されたことによるものが大きい。

ユネスコ創造都市とは2004年に文化の多様性の保護を重視するユネスコが創造的・文化的な産業の育成、強化によって都市の活性化を目指す世界の各都市に対し、国際的な連携・相互交流を支援するものである。デザイン以外にも映画や食など全７分野があり、サンテティエンヌだけではなく、2008年には名古屋市も加盟が認定されている。

このユネスコ創造都市のネットワークは、このサンテティエンヌ国際デザインビエンナーレでも、プログラム・ディレクターである江坂恵里子氏（名古屋市観光文化交流局）の多大なる尽力により、日本との深い関わりを実現していた。名古屋市は今回のビエンナーレでいくつかの日本文化発信を行った。

その中でも特にビエンナーレの企画としてサンテティエンヌの伝統織物の美術館であるLa maison du passmentier（リボン美術館）でのTextiles croisés展、名古屋在住のアーティスト米山より子氏とサンテティエンヌのテキスタイル作家であるHélène Jospé氏の共同作品は見ごたえがあった。米山さんは東京藝大を卒業して現在は名古屋芸術大学などで非常勤講師をなさっており、鉄などの金属や和紙を使ってインスタレーションを行う作家で、近年は米粒を使った作品も手がけている。一方でサンテティエンヌ在住のJospéさんは、これまでアフリカやシリアなどの女性の民族衣装に興味を持ち、現地での蒐集や展示も精力的に行ってきた作家である。サンテティエンヌのJospéさんのご自宅にお邪魔させていただく機会があったが、アトリエには膨大な布が積まれており、最新作はシリアの女性と民族衣装をテーマにしたものであった。抑圧された民族、特に女性のあり方をテーマにした政治色の濃い内容であった。

このお二人の共同作品は、米山さんが作った米粒が間歇的につけられた糸の片方に、Jospéさんの染めたシルクのスカーフを不規則に裂いたものをつなぎ、それらを何本も束ねて部屋の端から端までたわませるようにして設置したものであった。米山さんによれば、展示室を茶室の床の間ととらえ、消息の掛け軸を掛けたイメージで制作されたとのことであった。日本とフランスの文化を交配し、そこから生まれる新しい関係性の見取りを鑑賞者側に委ねる、抽象的な作品であった。

米粒は米粒とは見えず、不規則な形のビーズのように糸についており、あることろはキラキラと輝き、あるところはマットな形で静かに存在している。お米の白色とスカーフの濃い色合いが絶妙な陰影を生み出しており、ちょうどオープニングパーティーに駆けつけた多くの観客から「美しい」「これは何か」という感想や質問が次々に出ていた。地元のテレビメディアにも取り上げられるなど、評判は高かった。これもそのクオリティの高さから十分にうなずけることであった。

このように、サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレの興味深い点は、デザイン展示にありがちな単なる地元企業の商品プロモート合戦に陥らず、時にはペリコのように研究として学究的に、時には米山さんのようにアートとの境界線上でクリエイションが行われている点である。アーティストである米山さんと、テキスタイルデザイナーでもある

Jospéさんのコラボレートはまさにその象徴的なあり方であった。それはどれがデザインでどれがアートかという偏狭な区別を拒む、サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレの矜持であったと思われる。

他にも着物を現代風に斬新にアレンジした作品が並ぶMaki TAKAHASHIさんのJAPON : VOYAGE TEXTILE展、昔の現像技術を使った写真の展示やワークショップも行ったCou Cou, Je suis revenu展など、名古屋在住の作家たちの展示が、サンテティエンヌで大きな存在感を示していた。これもユネスコデザイン都市名古屋のビエンナーレへの深いコミット力であると見受けられた。

4　結びにかえて

サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレには、幼い子供から学生、杖を突いた老人まで、地元の人々や世界各国から多くの人々が訪れ、活気を見せていた。

それというのも、ビエンナーレが提出している問いかけが、特定の大手企業や年齢層だけに絞った商業的なものではなく、会場内のどこかに必ず「あなたの問題」が見つかるからであろう。

また大都市でありがちな地元の人が知らないようなビエンナーレではなく、街を挙げての催しであることも肌で感じることができた。特に学生たちは一端のデザイナーやアーティストとしての知識と意見を求められ、その取り組みにシテや事務局が最大限に応えようとする姿勢も素晴らしかった。学生企画のためだけの立派な冊子が用意されていたり、近隣の美術・デザイン学校の学生のブースもたくさんあった。（この中にはちょうど会期中に迎えた3.11の福島をテーマにしたものもあり、ポスト原発のエネルギー問題などが取り上げられていた）

学生だけではなく、市内に在住のデザイナーやアーティストもギャラリーや自宅のアトリエでサンテティエンヌ国際デザインビエンナーレに合わせた展示を行っていた。私の友人のデザイナーも自宅のアトリエでテキスタイルのワークインプログレスを実施していた。このように市民も気軽に参加し、互いの作品を見る機会が２年に一度提供されるというのは大きなチャンスである。

この10度目を迎えたサンテティエンヌ国際デザインビエンナーレによって、今年も確実に都市は姿を変えた。学生たちや研究者、参加した人々は「未来の労働」と「希望としての生活」を描き、それに向けての確実なステップを構想したと思われるのである。

※この度のサンテティエンヌ国際デザインビエンナーレをめぐる研究活動は、同志社大学エコ美学センターとJSPS科研費25560018の助成を受けて実施された。ここに心からの謝辞を表したい。